

社長メッセージ



日本赤十字社
社長 近衛 忠輝

日本赤十字社医学会は、様々な職種からなる約6万人にのぼる職員を会員としており、医療にとどまらず赤十字が直面する様々な課題について議論を交わすことのできる、貴重かつユニークな場です。その第47回目の総会が本日開催されますことを、お慶び申し上げ、立派な成果が上がることを期待しております。

今年、日本赤十字社が直面した最も大きな試練は、何と云っても3月11日の東日本大震災であります。わが国にとって未曾有の大災害であり、多くの方が瞬時に命を落とされました。そして、被災者の苦悩は未だ続いています。大震災の当初から私達はもっと多くの人を救えなかったか、もっと良くやれなかったかを自問し続けてきました。その答えは出ないかも知れないし、出るとしてもずっと先の事になるでしょう。

発災当日には全国から46の日赤医療救護班が被災各地に入り、翌日には60班が活動を展開しました。情報がまったく入らないなかでまずは現地に行って自らニーズを探り、活動の拠点を作ることが先決でした。

とりわけ被害が甚大だった宮城県石巻市では、地域の病院が壊滅的な被害を受けるなか、唯一病院機能を維持できた石巻赤十字病院が災害救護の拠点となりました。多くの救護班がその応援に駆け付け、そこから状況の把握ができていない周辺の各地に散って行きました。その活動はメディアにも大きく取り上げられました。ちなみに、石巻赤十字病院は昨年の日赤医学会総会を担当した病院でありました。

石巻赤十字病院は、5年前に内陸に移転し免震構造を持つ建物として建て直していたことから、地震の被害を免れました。元の地に残っていたら壊滅的な損害を受けたことでしょう。また、病院設備についても、緊急時には廊下のスペースも使え、病院の全機能を維持するために必要な電力を供給できる大型の発電機を備えていたことも役に立ちました。また最近、地域の災害の拠点病院に指定され、協力

の枠組が作られて訓練を重ねてきたことでも、成果を発揮することができました。

全国の病院、福祉施設、血液センター、本社・支部から多くの業種の職員が参加したこの度の救護活動で、彼らは現場で実に“燃えて”いました。困難な体験にも拘わらず、その多くが災害救護にやりがいを見出し、赤十字ならではの一体感を実感したと聞きました。そして被災者から直接に感謝の気持ちを伝えられ、「赤十字病院で働きたい」と希望する研修医が増えたとも聞いております。

全国に92ある赤十字病院のうち、59は災害拠点病院に指定されており、国内の救命救急拠点の15%近くを赤十字病院が占めています。赤十字の病院は「いざ」という時のためにあるといっても過言ではなく、そのための備えがあったからこそ、今回の大災害においても迅速な対応ができたと言えます。さらに、中長期の被災地の医療ニーズに応えて行く上では、全国的なネットワークを活かすことができることも海外からの支援に頼れることも、他にない赤十字の強みと言えるでしょう。

今回の震災では、当初から赤十字の国際的なネットワークの力が発揮されました。国際赤十字・赤新月社連盟（連盟）の代表は発災翌日に来日し、赤十字国際委員会（ICRC）は原発問題の専門家3人を80台の線量計とともに派遣してくれました。イギリス人の連盟広報担当者は、まだ地元の行政もメディアも被災状況を把握できていなかった発災3日目に私と一緒に被災各地を廻わり、手付かずの悲惨な状況の下での日赤の活動について衛星通信を使って詳しく世界に発信してくれました。

震災直後には7ヶ国の赤十字の代表に被災地を訪問してもらい、現状について直接本国に報告してもらいました。また5月の初旬には20の支援社を東京に招いて、復興計画への協力について話し合いました。その間私は連盟とICRC本部のあるジュネーブ、ニューヨークの国連本部、アメリカ赤十字社などを訪問し、多くの赤十字社や国際機関の関係者と会う機会があり、日赤の救護活動がどこでも高い評価を受けていることを知りました。国内の義援金とあわせ、海外からの救援金も日赤に集中した背景には、迅速で的確な情報発信があったことは疑いなく、災害時における内外に向けての広報の重要性を今回の震災であらためて実感したところです。

今回の総会では「赤十字の明日を育てる - 健康長寿日本の中で - 」というメインテーマが掲げられています。今回の震災では、高齢社会ならではの救護の在り方も色々と考えさせられました。

震災の大きな被害を受けた東北地方の沿岸部は、もともと高齢化が進んでおり、行き場を失った被災したお年寄りや、介護のマンパワーや機能を持たない病院や避難所での苦しい生活を強いられることになりました。福島でも原発事故で避難させられた高齢者が、新しい環境に馴染めず、亡くなったとの悲しい報道もありました。

赤十字は災害救護を使命としていますが、現場では、被災者の命を救い健康を守るだけでなく、お年寄りなど社会的弱者への特別な配慮が求められました。そのため日赤の福祉施設の職員が初めて救護に参加しました。高齢化が進んだ地域で災害が起きた場合の救護や、災害現場における医療と福祉の連携のあり方は、今後の課題であると感じています。

平時であっても災害時であっても誰もが安心して暮らせる「健康長寿日本」を実現するために、赤十字がどのような役割を発揮し、ひいては日本の医療や福祉の未来をどう切り拓いていくのか、本学会で皆さんが議論を深め、赤十字の進むべき道を見出していただくことを念願しております。

ごあいさつ



日本赤十字社医学会
理事長 山田 史
(日本赤十字社事業局長)

本医学会も昭和39年に発足してから今年で47回目の総会を迎えることができました。これもひとえに会員の皆様方のご支援ご協力のおかげであり、心から御礼を申し上げます。

本総会は、日本赤十字社に勤務する様々な職種の職員が全国から一堂に会し、医療及び赤十字事業に関する知識と技術の向上を図ることを目的として毎年開催しており、本年も多数の会員の参加と様々な分野の演題が予定されており、本医学会に対する皆様の高い参加意識が覗え、今後も本医学会が益々発展していくものと期待しています。

本年3月11日に発生した東日本大震災では、私たちの想像を大きく超える津波が太平洋沿岸部に襲いかかり、死者・行方不明者を合わせると2万2千人超という未曾有の被害をもたらしました。

今般の震災でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りし、ご遺族の皆様には心からお悔やみを申し上げますとともに、被災された皆様にお見舞いを申し上げます。

私たち日本赤十字社は地震発生直後から直ちに医療救護班を被災地に派遣し、現在までに5千人を超える職員が約8万人の被災者の方々への救護活動を行いました。災害救護は、日本赤十字社の使命に基づく活動であり、甚大かつ深刻な被害を受けた現地との連絡が取れない中、赤十字病院には早急に救護班の派遣に対応をいただき厚く御礼申し上げます。

しかしながら、この未曾有の災害では、私たちにも大きな課題を残すこととなりました。広範囲に渡る被害、地域行政機能の喪失、福島第一原子力発電所事故による放射能の脅威と今まで私たちが経験したことのない事象が次々と発生する中で、私たちがひとつの組織として機能する上で問題点が提起されました。今後発生が予想されている首都直下地震、東海地震、東南海・南海地震への対応が喫緊に叫ばれるなか、震災で発生した諸問題についての反省を踏まえた対策を早急に講じ、改善を図る必要があるものと考えております。

今般の震災では、災害救護に携わった多くの職員から、赤十字の使命、役割を再認識したという声

が聞こえております。このような時にこそ、赤十字施設、職員間での結束を固め、連携を更に深めていくことが大切であり、赤十字がひとつの組織として同じ目標を共有し、一体となって取り組むことが諸問題の改善、解決に繋がると考えます。

さて、ここ福井には「人道の港」と呼ばれた敦賀港があります。この敦賀港は1920年に「ポーランド孤児」、1940年には、「命のビザ」を持ったユダヤ人難民が上陸した日本で唯一の港であり、「ポーランド孤児」の受け入れの際には日本赤十字社が人道の危機に対し、迅速な救護活動かつ手厚い保護を行いました。それから1世紀を迎えようとする今日においてポーランドは伝統的な親日国としても有名であり、その親日感情の源となった先人達の働きには感銘の意を感じるとともに現在に生きる私たちにとっても大きな糧となっています。

本年度の総会では「赤十字の明日を育てる - 健康長寿の日本の中で - 」というメインテーマが掲げられております。超高齢化社会を迎え医療を取り巻く環境がますます厳しくなる中、赤十字の明日を考えますと、赤十字職員が一致団結し、不断の努力を怠らないことが重要であると考えます。本総会は、施設や職域を越えて多くの職員が一堂に会す貴重な機会でありますので、会員の皆様におきましては、他の施設の職員の方々と活発な意見や情報の交換を行い、赤十字というひとつの組織として団結を深めていただくことが、皆様の今後の糧になることを願っております。

今回の総会の開催にあたりましては、総会会長である福井赤十字病院の野口 正人院長をはじめ、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。今後とも本学会の更なる発展のため一層のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年10月20日

ごあいさつ

「東日本大震災に対する災害救援活動が続く中で
～第47回日本赤十字社医学会総会開催に向けて～」



第47回日本赤十字社医学会総会
会長 野口 正人
(福井赤十字病院 院長)

戦後最大の東日本大震災に対する災害救援活動がなお続いている状況ではありますが、第47回日本赤十字社医学会を中部ブロックの担当で、福井赤十字病院が当番病院となって開催致します。

被災地の皆様には、謹んでお見舞いを申し上げますとともに、不幸にしてお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。

医学会の準備を始めた頃は、超高齢社会となった日本において日赤病院の医療事業を今後どのように展開したら良いか、その病院医療を支える人材育成はどうしたら良いか、について考える学会にしようとする方針を定めました。そして、「赤十字の明日を育てる 健康長寿日本の中で」をメイン・テーマとして、全国の日赤医療人の英知を集める学会を開催する予定でした。

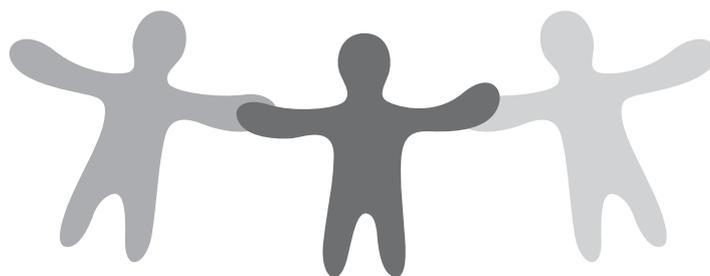
しかし、3月11日に宮城県、岩手県、福島県を中心に甚大な被害をもたらした大震災・大津波が発生し、発災直後から日本赤十字社は総力を挙げて災害救護活動を展開し、8月をもってその活動は一段落したとはいうものの、現在もなお支援活動を継続しています。一時は本医学会の開催が危ぶまれましたが、急速その内容を見直し、日本赤十字社が全国の力を結集して展開している国内最大級の災害救護活動にも強く焦点を絞り、明日の赤十字を育成する学会、被災地を支援する学会として開催することになりました。学会では緊急時の災害救護活動と平時の健康長寿社会で実践する赤十字医療を二本柱として、様々な発表がなされ、有意義な議論を展開していただければ幸いです。

シンポジウムは、「未曾有の災害救援活動」と「健康長寿を支援する日常診療での取り組み」の二つとし、シンポジウムに連携する形で市民公開講座「人間を救うのは人間だ。～東北・ハイチ大震災での赤十字救護活動～」を開催致します。

特別講演は、人間に一番近いチンパンジーの独創的な研究で注目され、老化を含む幅広い研究成果を収めている京都大学霊長類研究所長の松沢哲郎先生に、「人間とは何か チンパンジー研究から見えてきたこと」と題する講演をお願いしました。

教育講演は、「ロコモティブ・シンドローム」という新たな疾患概念を提唱し、健康寿命を延ばす医療を展開している日本整形外科学会前理事長（国立障害者リハビリテーションセンター）の中村耕三先生に、「高齢者に求められる医療 ロコモティブシンドローム」の題で、講演していただきます。

本学会は東日本大震災の影響で参加者が減るのではないかと危惧しましたが、応募演題数が660題を超え過去最多となり、当番病院として大変嬉しく思っています。その反面、学会場が手狭になるかも知れないと心配していますが、福井空襲と福井大震災の災害に2度襲われながらも不死鳥の如く立ち直った福井の地で、東日本大震災で被災された方々を勇気付ける、また被災地の復興を祈念する日本赤十字社医学会を開催できる事は、何かの縁と思います。参加される多くの日赤医療人の皆様にご協力いただき、本学会を成功裡に開催運営したいと考えていますので、どうぞ宜しくお願い致します。



結ぶきずな 地域とともに

（福井赤十字病院 地域医療連携スローガン・ロゴマーク）